春の日

一、二　廣田　T　H

祈ることなき身なれともかにかくに額つきにけり御佛のまへ。
あたゝかき春の日照りて江戸川はうす藍色に光るなりけり。
江戸川のよもきの中に見出てたるたんぽゝの花紫の花。
思はざるものに逢ひたる心地して寸ばかりなるたんぽゝ愛でぬ。
同じくは雲雀の如く遊ばんと心いそ〳〵野の道をゆく。
よくはづむゴムまりの如輕やかの心抱きて野の道をゆく。
しばらくは足にまかせて歩みけり春の日中の人の戀しき。
ひた〳〵とふなべりたゝく水にさへ心うれしむ春の大川。
時々は白波たてゝ大河を行德行きの川蒸汽過ぐ。

港

一、二　A.　B.　C

うす青き夜のさぎりのみなぎれる港にひくゝ汽笛さびしも。
ひたひたと潮のぬらす棧橋を友ひとりおきて舟ははなるゝ。

旅行

灯の赤き人形店に妹らのみやげかふさへ旅はうれしき。
白たびのうすよごれたるそれにだに旅の愁のわく夕かな。
旅に來てきゝおぼえたる京言葉友への文にかく夕かな。
うち見やるゆふべ増毛の山々の薄紫も憂しや船旅。
いつまでかつゞかん旅は今日もまた入日の野路をたどりつゝゆく。
黒川のほとに來れば我が涙つひに流れし初旅の日よ。
冷かに潮風の吹く砂山に濤の音きく旅の夕ぐれ。